

Kasugai City Philharmonic Orchestra

**第13回
春日井市交響楽団定期演奏会**

2004年7月4日(日)

午後3時 開演

春日井市民会館



ごあいさつ



ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜飼 一郎

七夕飾りが涼風に揺れ、風鈴の音が清々しい季節となりました。

本日は、第13回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。学生と社会人により結成された本楽団のメンバーが、日々研鑽を積み練習に励んだ成果を発表する場として、また、市民の皆様にはクラシック音楽をより身近に親しんでいただくための場として、本日の定期演奏会を開催できますことは、ひとえに関係各位および市民の皆様のご支援の賜物と心より感謝を申し上げます。

今回、ソリストには世界的に高名なヴァイオリン奏者であり、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターでもあるライナー・キュッヒル氏を招聘するとともに、指揮者には名古屋近郊を始め各地で意欲的に活動しておられる吉住典洋氏をお迎えいたしました。ご来場の皆様には世界最高のヴァイオリンと管弦楽が織りなす絶妙のハーモニーの中で、必ずや至福のひとつきを過ごしていただけるものと確信いたしております。

春日井市では県下に先駆けて文化振興に関する施策の核となる「春日井市文化振興基本条例」を制定し、さまざまな施策を進めることにより、文化のまちづくりを推進しております。今後も文化に対する市民の皆様のご関心と理解を深めていただくよう努めてまいりますので、本楽団共々、皆様方のさらなるご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、今日のこのひとときを存分にお楽しみください。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監
三浦 昌夫

本日はようこそおいでくださいました。

ライナー・キュッヒルさんをソリストにお招きしての第13回春日井市交響楽団定期演奏会です。

偉大な歴史的な指揮者と数々の名演奏を生み、数々のウィーン・フィルの伝説と神話を生んだコンサートマスターのライナー・キュッヒルさんが、ここ春日井で、大勢の市民のみなさまの前で、市民オーケストラと共にベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏するのは、大きな喜びであり、大きな驚きです。

いつも、「春日井市交響楽団は海外に開かれた春日井市の音楽文化の窓でありたい」とつとめてきましたが、それがこのような最高の形で実現することができましたのも、音楽を「熱愛する者」（これはアマチュアの語源でもあります）に対するキュッヒルさんの「思いやり」のおかげと存じます。そこに、「ノーブレス・オブリージ」からは遠く離れた、「共に音楽を演奏する」（ドイツ語のmit-musizieren）ことへの喜びを感じ、強い感動をおぼえます。

指揮は、昨年にひきつづき吉住典洋さんです。すべての団員の信頼をえて、本日も名演奏が期待できます。

また、この演奏会の実現に多大のご協力をいただいた音楽事務所ドルチェの貴田なおみさんと中日新聞春日井支局のみなさまにも、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

開演を前に、様々なことを思うとき、本日はいつにもまして興奮を禁じ得ません。演奏をする団員はなおさらのことでしょう。

では、ごゆっくりお楽しみ下さい。

プログラム Program

スメタナ(1824-1884)作曲

Bedřich Smetana

交響詩《わが祖国》より「モルダウ」

Die Moldau

aus der Symphonischen Dichtung

Mein Vaterland

ベートーヴェン(1770-1827)作曲

Ludwig van Beethoven

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61

Konzert für Violine und Orchester D-dur Op.61

- 第1楽章 Allegro ma non troppo : アレグロ・マ・ノン・トロッポ
(快速に、ただし、急ぎすぎないで)
- 第2楽章 Larghetto : ラルゲット (やや遅く)
- 第3楽章 Allegro : アレグロ (快速に)

《休憩》 Intermission

ドヴォルザーク(1841-1904)作曲

Antonin Dvořák

交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」

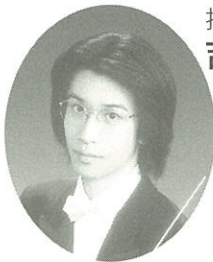
Symphonie Nr.9 e-moll Op.95

Aus der Neuen Welt

- 第1楽章 Adagio : アダージョ (ゆっくりと)
- 第2楽章 Largo : ラルゴ (遅く)
- 第3楽章 Molto vivace : モルト・ヴィヴァーチェ (とても速く)
- 第4楽章 Allegro con fuoco : アレグロ・コン・フォーコ (火のように快速に)

ヴァイオリン独奏 ライナー・キュッヒル
指揮 吉住 典洋
演奏 春日井市交響楽団

プロフィール



指揮
吉住典洋

Norihiro Yoshizumi

愛媛県今治市生まれ。愛知県立芸術大学管打楽器コースを卒業、研究生を経て同大学大学院音楽研究科終了。サクソフォンを永岡嘉夫、雲井雅人、室内楽を菅原眸、中川良平、村田四郎、オーケストラ・レパートリーを中川良平の各氏に師事。同大学定期演奏会には、J.S. Bach/NakagawaのMarcello Concerto III BWV974のソリストとしてソプラノ・サクソフォンを演奏、好評を博した。よんでん文化振興財団奨学金を受賞。在学中より指揮者としての活動を開始、名古屋二期会において外山雄三氏のもとでアシスタントとしての研鑽を積む。以後「中川良平のTokyo BACH-BAND」、日生劇場オペラ名古屋公演など。佐藤功太郎、古谷誠一、松尾葉子、竹本泰蔵、現田茂夫、沼尻竜典各氏のアシスタントを歴任する。またその間も自らのタクトでオーケストラや合唱など数々の音楽愛好団体と共演、1998年からはセントラル愛知交響楽団、2000年から名フィルユニオンコンサートに出演する。1999年、アシスタントとして入っていた名古屋市文化振興事業団主催「かるめんじょんず」（原作G. Bizet: Carmen）の最終日公演において急速指揮を命ぜられピット・デビュー、好評を博した。最近では春日井オペラ八百比丘尼物語初演を、アンサンブル・セルメルとStravinskyの兵士の物語を指揮するなど、意欲的な活動を見せている。

現在、愛知県立芸術大学、愛知県立明和高等学校音楽科各非常勤講師。

(続)よしずみ語録

昨年に引き続き吉住先生の練習からご紹介します。昨年も繰り返し仰っていた「音を発音するタイミングよりもその準備で合わせる」ということを、より具体的に曲を合わせる中で示してくださいました。

(文責:宮田義郎(FI))

●例えば8分の6拍子の「ヴァイオリン協奏曲の3楽章」では…
1と4で音楽をやっていくと、どうしても軽薄な音楽になってしまう。裏を感じて、3と6からとってください。3と6を絶対あわてないで、3から4、6から1にいくときにちゃんと分離して。これは全体のテンポが早い、遅い問題ではなくて、いかに拍子感を感じているかです。キュッヒルさんの演奏を聴いていて3と6の裏が心地よく感じられるといいですね。

●同じく8分の6拍子の「モルダウ」でも…

前の音を感じられていれば、出る音が合わせられます。準備があまりいまいだとそろわない。準備の中に次の音を予測して、その予測が合ったということが確認できたら、目をつぶっていても合うんです。八分音符の取り方が決まったらモルダウが本当に生き物のようにうわーっと暴れ出すんです。お互い3と6を開かせ合う、聴き合うんです。(最後の次第に遅くなるところも)3と6を聴き合ったらいくらでもプレーキがきくようになります。

●そのための練習法として…

僕が1を叩く(手拍子)皆さんが3で叩く。これが最初の段階としてできてほしいですね。その次は、メトロノームをかけて、それを3に聞いて、自分は1を叩いてみてください。これを本番までにぜひやっていただきたいですね。



バイオリン独奏
ライナー・キュッヒル

Rainer Küchl

ウィーン・フィルハーモニーのコンサートマスター。

1950年オーストリアのヴァイトホーフェン・アン・デア・イプス生まれ。11歳よりヴァイオリンを始める。

1964年ウィーン国立音楽院に入学し、サモヒル教授に師事。

1971年ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターに就任。

1967年よりソロ活動を開始し、ウィーン・フィル、ウィーン交響楽団、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、NHK交響楽団などのオーケストラ並びに指揮者では、アバド、バーム、バンスタインと共演。同時に数々のリサイタルや放送録音を行なう。オーストリア共和国よりオーストリア芸術名譽勲章を受賞をはじめ数々の賞に輝いている。

オーケストラ 春日井市交響楽団

Kasugai City Philharmonic Orchestra

市民オーケである春日井市交響楽団は、第九の演奏会を春日井でも開きたいという市民の要請から生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年(平成2年)11月に創立されました。

愛称『カポ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo:頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちに与えて最大の喜びは、一人でも多くみなさまに演奏会においていただき、クラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の海外に開かれた窓」となって国際的な音楽家との共演にも努めています。

これからは、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。

温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

ミューズの神よ、ご加護を！

キュッヒルさんへの感謝と市民のみなさまへのお礼

春日井市交響楽団ほど、恵まれた市民オーケストラはない — というのが今回の定期演奏会を開くに当たっての私たち全員の感慨です。ウィーンフィルのコンサートマスター、ライナー・キュッヒルさんを間近に見るだけでなく、ご指導を受け、一緒に演奏ができるなんて — これまで考えたことがあったでしょうか。それも、ベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」という名曲で大曲であるのですから、私たちの喜びと感激はここに極まったと言っているでしょう。

この貴重な機会を得ることができたのも、春日井市民のみなさまのおかげであることを知っている私たちは、この晴れの舞台を名演奏で飾りたいという思いに満たされました。それで、日夜、指揮者の吉住典洋先生やトレーニングの先生方のご指導のもと、練習に励みました。こんな楽しくて幸せな日々はありません。

そして、今日です。いま、開演を前にした私たちは、キュッヒルさんへの感謝と市民のみなさまへのお礼にふさわしい演奏をするべく、いつにも増して興奮と緊張を禁じ得ません。ミューズの神のご加護を…。

モルダウ

交響詩「わが祖国」より

ベドルジハ・スメタナ(1824-1884)作曲

今年2004年は、チェコの作曲家スメタナの没後120年、ドヴォルザークの没後100年、ヤナーチェクの生誕150年に当たります。私たちは、このチェコの三大作曲家の記念の年に、定期演奏会でスメタナとドヴォルザークの作品を取り上げました。まず、全6曲からなるスメタナの交響詩「わが祖国」から、もっとも有名な第2曲「モルダウ」をお聞き下さい。

いまでは、チェコ国民音楽の祖といわれるように、スメタナは、チェコの国と国民と文化を愛して、そのために殉じました。この交響詩「わが祖国」も、その名の通り、スメタナが故国に捧げた愛国の音楽です。全6曲は、1874年から1876年にかけて書かれたのですが、第1曲の「高い城」が完成されたときには、もう耳はほとんど聞こえませんでした。

第2曲の「モルダウ」は、ブラハの街を流れる川にドイツ人がつけたドイツ語の名前です。チェコの人たちは、この川をチェコ語で「ヴァルタヴァ」と呼んでいますから、このごろではこの曲もその名前と呼ばれることが多くなりました。

「ヴァルタヴァ」についてスメタナは次のようにいっています — 「この川は二つの水源から発し、次第にその幅を増していく。兩岸には狩りの角笛と田舎の音楽がこだまする。月の光。妖精の踊り。やがて流れは聖ヨハネの急流にさしかかり、波はしぶきをあげて飛び散る。ここから川はブラハ市に流れ込み、ここで古く尊いヴィシェフラト城に敬意を表する。そして、遠く大海へと流れて消える」(門馬直美さんの解説を参考にしました)。

ヴァイオリン協奏曲

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770-1827)作曲

この作品は、メンデルスゾーンとブラームスとチャイコフスキーの協奏曲と共に、四大ヴァイオリン協奏曲の一つとされる名曲です。完成度から言っても、格調の高さから言っても、四曲のなかでも冠たるものがあります。ベートー

ヴェンの「傑作の森」といわれる、もっとも円熟した中期の作品群にあって、もっともベートーヴェンらしい、規模雄大で、格調高く、緊迫感をもった大曲です。1806年(作曲家36歳)にウィーンで作曲され、12月23日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されましたが、「最高に恵まれた状況で行なわれた」などと言えないのは、ソリストもオーケストラも楽譜をざっと見ただけでリハーサルもなしで直ぐ本番という有様だったからです。キュッヒルさんはそんなことには驚かないでしょうが、半年以上も練習を続けている私たちには全く考えられないプロの本領発揮と言ったところでしょう。でも、この作品は40分ととても長かったので、当時の慣習に従って、第1楽章は演奏会の第1部で演奏され、残りの2楽章は休憩後に演奏される — といったお客に迎合したものでした。またそのとき、ヴァイオリンのソロを受け持ったフランツ・クレメントは、お客さまの気晴らしのために、彼は自作のソナタを一本の弦だけで、それもヴァイオリンを裏返しにして奏してみせました。まるでサーカスのようなこの「曲奏き」は、お客を喜ばせヤンヤの喝采を博しましたが、それを見ていたベートーヴェンは、さぞ面白くなかったことでしょう。お陰でベートーヴェンの協奏曲は、すっかり影の薄いものになってしまい、結局失敗に終わってしまいました。とはいえ、クレメントはどうやって奏いたのでしょうか。見てみたかったですね。この初演時の失敗もあって、その後長く忘れられていましたが、ベートーヴェンの死後17年経った1844年に、13歳の天才少年ヨアヒムが、メンデルスゾーンの指揮で復活させてから広くみとめられるようになりました。いくつもの出版社が出版を断ったので、総譜が完全形で印刷されたのは、この曲が完成してから88年たった1894年のことでした。ベートーヴェンは、独奏ヴァイオリンが各楽章の終わりに一人で即興的に奏く「カデンツ」を書いています。そのため、ヨアヒムやアウアーやクライスラーといった名ヴァイオリニストたちがカデンツを書いています。今回、キュッヒルさんがどのカデンツを使うかは分っていませんが、ご自身の手になるものである可能性は大きいと言えましょう。それも、キュッヒルさんの持てる技巧をすべてこらした、そのときだけの「名演奏」になることでしょう。期待や、大です。

第1楽章(快速に、ただし、急ぎすぎないで)ニ長調、4/4拍子。協奏風ソナタ形式。

冒頭のティンパニだけによる開始は、まったくベートーヴェンの独創的なものです。同じ時期の1807年に作曲された『ピアノ協奏曲第4番』が、いきなりピアノのソロで始まるのと機をいつにしています。ティンパニの「タン・タン・タン・タン」という単調なリズムは、「深夜に隣の家の戸を叩く音をヒントにした」そうですが、全楽章を通じて重要な役割を果たしています。また、形式は「ソナタ形式」とはいえ、ソロ・ヴァイオリンが登場するまでの序奏で、第1主題と第2主題がそろって呈示されるという、古典的な協奏曲の作風をそのまま受け継いでいます。この第1楽章は20分以上かかり、全曲の大半を占めるほど長いのですが、二つの主題が様々な楽器によって様々な彩りを変えながらなんども繰り返されるので、常に新鮮で刺激的に聞こえます。私たちの好奇心は十分に満足されます。

第2楽章(やや遅く)ト長調・4/4拍子。変奏曲形式。

フルートとオーボエとトランペットとティンパニはお休みにして、あくまでも静かで平安な夢の世界を作っていきます。弱音器をつけた弦楽器群が、孔雀の舞のようなゆっくりした主題を奏します。変奏は第3変奏までであり、第1